

庄司薫

白鳥の歌なんか
聞えない

白鳥の歌なんか聞えない

庄司薫

中央公論社

白鳥の歌なんか聞えない

©1971 検印廃止 定価450円

昭和46年2月10日 印刷

昭和46年2月25日 発行

著者 庄司 薫 発行者 山越 豊 印刷所 三陽社

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2-1 電話(03)(561)5921(代)

白鳥の歌なんか聞えない

ぼくは春が来るとなんとなく嬉しくてそわそわしてしまふのだけれど、そんなところをひとまゑでは絶対に見せまい、なんて変なところで頑張つて暮したりしている。何故つて、たとえばそんな具合にうっかりそわそわしているところを見せて、何が嬉しいのか、なんてきかれたらもう最後だと思ふわけだ。春が来たから嬉しい、なんて正直に答えたら、相手はカンカンに怒るか大笑いするかに決っているし、それになによりもそんな、何が嬉しいのか、なんてきかれること自体がぼくとしては全くザンキにたえないというか、ふがいないような気がしてしまふのだから。

そこへいくと、女の子つてのは、これは本当に気楽な商売みたいなのがあるんじゃないかな、というのがぼくのひそかに抱いている見解なんだ。たとえば、ぼくの小さい時からの女友達に由美というのがいて、彼女はまあなんていうか、本当にこう敵ながら天晴れみたいなたかな（？）ところのある女の子なのだけれど、そのくせどういうわけか時々ボカッと勝手に手を抜いて、この「春が来たから嬉しい」みたいなことを平気で言ったりしてくるのだ（もちろん彼女だって、本当に相手やTPOを選んでるにはちがいないとは思ふけれど）。つまり彼女は、ちやうどぼくの飼っていたドンという犬が電信柱の分布に詳しかったように、うちの周囲一

里四方ぐらゐの「縄張り」の中の花の分布にやたらと詳しくて、いつどこそこのどんな花が咲くなんてくだらないことを、実によく知っているのだ。そして、たとえば三月十五日頃に彼女が嬉しそうにそわそわした様子でやってきたのを見て、ぼくが「何が嬉しいんだい」なんてきいたとすると、彼女は「斎藤さんちのモクレンが咲いたの」なんて、まあなんて言うか、そりゃもう実にしあわせそうな顔をして言ったりするんだ。そして、もちろんモクレンだけじゃない。彼女がそりゃってそわそわ来るのが四月なかば頃なら咲いたのは野村さんちのナシの花だし、五月なら川添さんちのデカイキリの花だし、六月ならなんとぼくのうちのタイサンボクでなければ（みんなデカイ樹に咲く花なのは、堀越しに目立つやつだからだ）、確かにこの世の中には、人間に（というより女の子に）とつてのしあわせのタネは沢山あるにちがいない、といった感じがつくづくしてしまふほどのものなのだ。

ところで問題なのは、このぼくは、彼女がそんな具合に嬉しそうにやって来ると、馬鹿ばかしいような気がしながらもつい、「何が嬉しいんだい」なんてきいてやって、そして、へえ、なんて言つて、まるで生まれて初めて見るみたいなのにそのモクレンやなんかを見に散歩につきあつてサービスしちゃうようなところがある、つてところなんだ。まあこれは、ぼくが一般的に言つて相対の平和主義者というか、平たく言えばつきあひのいい男だつてことの単純な証拠かもしれないけれど、それにしても毎年のこととなると、そこには一種の「渡世の仁義」というだけじゃすまないようなインチキくささがあることを認めるにそうやぶさかじゃない（？）、といった感じもあるんだなあ。つまり、そういう花が咲いたからとか春が来たから嬉しいといった種類のことは、

あいつというか女の子にとにかくとてもよく似合うものだから、それに水をかけるようなことは絶対にしちゃいけない、なんて自分に言いかせておいて、実はこのぼくもホクホクとおおっぴらにお花なんか見に行く……。ああ、これは相当にややこしいよ。ぼくにだって「心なき身にもあはれは知られけり」ってところがあるのは当り前のことなんだから、なにもそうガタガタ考えることはないとも思うのだけれど、それにしても一体これはどうなってるんだらう。

ところで、今年は三月に入って四日と十二日と二度も大雪が降ったりしたせいかな、由美がホクホクやって来て、ぼくを斎藤さんちのモクレンを見におびき出したのは三月十九日だった。大快晴なんて言葉があるのかどうか知らないけれど、朝から素晴らしいお天気で、朝の十時というのに二階の東南向きのぼくの部屋はポッポとあたたかかった。そしてぼくはもう勇ましく半袖のポロシャツになって頑張っていたのだけれど、たまたま机から離れて窓から外を眺めていたら、向うの西島さんの角を曲って由美がやって来るのがうちの塀の端のユズリ葉とビワの木の間から見えたのだ。彼女はからだにぴったりした白いタートルネックのセーターに、濃いブルーのミニスカートを付けて、まっ白なりボンで前髪を抑えて、白いペチャンコ靴をはいて、手をうしろかなんかで組んじやって、なんとなく幼稚園のお遊戯でアヒルの真似をするようなかっこうで、ひと足ひと足うなずくみたいにリボンを振りながらのんびりと歩いてきた。これは彼女が相当に御機嫌な証拠で、ぼくは思わず窓をあけて、アメリカ映画なんかのイカスおニちゃんみたいに口笛でも吹いてやりたいような気持ちになったのだが結局のところやめた。そしてぼくが何をやったかと

いうと、実際には大あわてでさっさと窓を離れ、相当に真面目な顔をして机に向って鉛筆なんかにぎっちゃって、広げたノートの上に大きなアヒルのマンガなんかをゆっくりと画き始めた、つていったようなだらしなない次第だった。何故って、つまり、まあ要するにぼくだって、口笛吹くのと同じ具合に、たとえば門のかけかなんかで待伏せして、ワッ、キャッ（これは彼女だ）なんてやってみる種類のアイデア（そしてもちろんテレビだと、キャッのあとで彼女はバカアなんて言っただけの腕の中にとびこむわけだ）がうかばないわけじゃないのだが、でもこれが、分ると思うけれどなんとなくだめなタチなんだ。それに、考えてみれば相手も相当に悪いってことがある。つまり、由美ってやつは、なんていうか、やって来たな、なんて思っただけで構えていても実は素通りしちゃったり、そうかと思うとあきらめた頃になつて呼鈴を押したりするような猛烈気まぐれなところが、それこそ一人でうちへ遊びに来られるようになったチビの頃からあるわけだ。そして、こんな女の子が相手となると、たとえばその門のかけからワッなんてのにしても、ひどく滑稽で間の抜けた独り芝居になっちゃう可能性が猛烈大きいのは明らかなんだなあ。ところがその日は、アヒルの尻尾だけ画いたらもう呼鈴が鳴るのが聞えた。へえ。

やがてバタバタと階段を駆けあがってくる足音が聞え、ノックと同時にドアがあいて女中のヨツちゃんがとびこんで来た。

「由美さんです。」

「ふうん。」と、ぼくはまだわき目もふらず机にかじりついたまま（もちろんマンガを画きながら）なま返事をした。

「門のところでお待ちです。ブラブラ散歩なさってるんですって。」

「へえ。」と言つてぼくは初めて顔を上げ、ゆっくり大きくのびをした。「いいお天気だなあ。」

でもぼくは、ちょっとあまりにも見えすいたことをやったような気がして、すぐあきらめた。

「すぐ行くよ。」

それからぼくは、まだつつ立っているヨッチちゃんの顔をやむを得ずといった感じで眺め、そして彼女の表情から思わずあごに手をやって、三日もそつていないでザラザラする髭をなでた。

「ちょっとお待ちくださいって言つておきましようか？」と、彼女はえらく真面目くさつて心配そうな顔をしてたずねてきた。

「え？ ……うん。」と、ぼくはあごをなでながら観念してうなずいた。

ぼくは、彼女が威勢よく階段を駆けおりていくのを確かめてからガバと立ちあがり、それからちよつと考へて着換えをした。つまり、黒いポロシャツにGパンというぼくの野戦服(?)を、明るいグレーのセーターと濃いグレーのスラックスに着換えたといったわけなのだ。まあ、こういう髭だとかセーターだとかいったことは、どうでもいいことじゃないかと心の底では思っているのだけれど、でもおそらくはそれだからこそ、かえつてそういうことをウカツに表に出して強調したりしてはいけないというような気もどこかでするわけだ。つまり、おかしい言い方だけれどぼくは、たとえばベーター・ベンが穴のあいた靴をはいて髪をふり乱して歩いていたり、晩年のブルーストが薄汚れたヨレヨレのカラーで晚餐に出てきたり、マルクスがチョッキのボタンをいづつもかけ忘れてたり、毛沢東がサエない綿帽子をかぶっていたり、ゲバラがお風呂に入らず汗く

さい野戦服でいたりするなんていうのを、猛烈カッコいいと思っちゃうようなところがある。でも問題は、というか、ぼくにとつての弱みは、（まあ当り前のことだけれど）彼らがカッコいいのは、彼らが実際にどういふなりふりをしたかではないということ、つまり彼らがそう言ったのは言うなれば必然的な結果というか、彼らがその力を使いつくすためのほんとうに大事なことを別にしっかりと手いっぱい抱えていたことによる、という点にあるのは言うまでもないわけだ。つまり逆に考えれば、そういう「なりふり」をどうでもいいこととしてしかもそれを公然とひとまゑでやって「善良な市民」をオドカス（？）以上は、それに見合うような大事ななにかをしつかりと見つけてやりとげなくちゃいけないのじゃあるまいか、なんて殊勝にも思い始めてしまう。そしてこういうのは、一旦思いついたらもうだめみたいなところがあるわけなんだ。つまり「第九」を書いてる最中のペーナーペンでもないのに髪ふり乱してこぶしをふりあげて一見大芸術家風に（？）歩いたり、ほんとうに革命をやってるゲバラでもないのに風呂にも入らず汗くさい野戦服で闊歩したりするのは、気恥かしいといふかなんというか、とにかくもういけなくなる。まあぼくだっていまにほんとに全力を傾けるような大事な仕事を見つけて夢中になって、乱闘服で髪ふり乱してチョッキどころかズボンの前ボタンまでかけ忘れて歩いたりできれば本望だとは思ふ。でも、まあそれまでは、頭の中では「どうでもいいことじゃないか」と思いつつも、大体においてヨッちゃんの忠告なんか素直に従って、着換えたりお髭をそったりしてひとまゑに出ていくのがまあ分相応らしいと、あきらめてるようなわけなんだ。

ぼくは大急ぎで髭をそり、MG5のローションでいい気持にピリピリしながら、白いペチャンコ靴をはいて、ノソノソと出ていった。

「いいお天気だわあ。」と、門柱に軽く寄りかかるようにして空を見あげていた由美が言った。

「うん。」と、ぼくも空を見あげた。眩ゆいばかりの青空がいっぱいに広がっていて、ところどころにやさしい絹雲がうかんでいた。

それからぼくは目を戻してちょっと彼女を眺め、(さすがにもはや口には出さなかったけれど)目で、例の「何が嬉しいんだい」の大サーピスをしてやった。彼女は、ちょっとまいったような眩しいような目ばたきをして、軽くあごをつき出すような仕草でおそらくは斎藤さんちの方をさすようにした(と、まあぼくは思った)。ぼくたちはそしてプラプラと歩きだした。

「どうしてた？」と由美がきいてきた。

「うん、まあね。」

考えてみれば、ぼくたちがこんなのにんびりと会ったのはずいぶん久しぶりのことだった。彼女の方は、入学試験とか卒業式でドタバタしていたし、僕の方も、大学こそ受けなかったけれどそれだけにいろいろ考えたりやったりすることがあったし、その上、別に相談したわけじゃないのだがほかににも大学進学に熱意を失った友達があちこちにいて、お互いに情報を交換したり、なんとなく「メダカは群れたがる」風に出会ったりして、ガタガタしていたわけだ。

「ねえ、気がつかない？」と彼女は、大学のことをまたいろいろと考え始めていたぼくにきいた。
「え？」

彼女は、目を軽く閉じて、肩のところで渦巻いている髪をちよつと揺するようにした。

「香水つけてんの分らない？」

「……？」

「ミス・ディオールっていうの。ほかにもらっちゃった。シャネルにイブ・サンローランにね……。」

「へえ。」

「大学の合格祝いね。あなたも大学に行つてれば、もらえたかもね。」

「(え?)」

ぼくは、彼女がけんかを売るつもりなのかどうかを確かめようと、チラッとその顔をうかがつたけれど、どうやら殺気はないようだった。

「香水って、フタをあけたら、すぐジャブジャブ使わなくちゃいけないんですって。でも百メートルも先から分るなんてやあね。そしたらどうなるかしら。」

「さあ、どうなるかなあ。」

「あなた、風邪ひいてない？ 鼻つまってちゃ困るのよ。試してるんだから。」

「風が吹いているから分らないよ。」

「ここんこよ。」と言って、彼女は右手の指先で耳の上の毛を上げるようにした。ぼくは首を振った。

「ほんと？」 彼女は立ちどまって、髪の毛をひっぱるようにしたまま、耳をすますようなえらく

真剣な表情で、微かに鼻をうごめかした。「オーデコロンの四倍だなんていうから、恐る恐るだっただけど……」

それから彼女は、口の中で小さく、あーあ、と呟くと、急にややとってつけたような感じではあったけれど、ふん、というように頭を上げて、少し早足になって先に歩き出した。ぼくは、あまり露骨に追いかける様子も見せず、といってわざと遅れたままみたいな感じにもならないように、といった相当に微妙な感じで（あーあ、全く女の子ってのは手がかかるんだ）ゆっくりと追いついていった。

やがて斎藤さんのうちが近づき、ぼくたちは、白い漆喰の塀の上に、高さ五メートルはありそうな大きなハクモクレンが、まるで大きな若い白孔雀が初めてその羽根を広げたように、まだ開きかけの白い花をいっぱいにつけているのを見つけた。ぼくたちは、道をへだてて反対側のうちの塀に、背中をくつつけるようにして並んでもたれかかり、しばらくうっとり、このぼくたち二人の春のしるしともいうような柔かく若々しく美しいハクモクレンに見とれた。春がほんとうに来たんだ。

ぼくがこっそりと左わきに肩を並べた由美を眺めると、彼女は心なしか頬を紅潮させ、少し口をあけてモクレンを見つめていた。ぼくはなんとなくすぐに目をそらした。そして何故ともなく深く息を吸うと、まるで柔かなモクレンの花が匂うかのように、彼女のつけた香水のやさしく爽やかな香りが突然のようにぼくを包みこんだ。

でも、それにしてもしみじみと思うのだけれど、ほんとうに、女の子を相手にした時のこと、成行きってやつは分らないものなんだ。つまりぼくたちは、それからまたブラブラと歩き出してすぐそばの小さな公園の中に入りこみ、ちやうど誰もいなかったのでまん中の花壇のわきの古ぼけた木のベンチに腰かけた。そして彼女はえらく御機嫌で、例のつまらない「鎌倉の大仏」の話なんかし始めたのだけれど、このあたりまでは、ぼくたちは確かに一点非のうちようもないほど友好的にやっていたわけなのだ。つまり、こんな具合だった。

「あなた、鎌倉の大仏いつたつたか知ってる？」

「鎌倉の大仏？ さあ、いつだつたかな。鎌倉幕府は一一九二年だろ？ えーと……と。なんだい、そんなのが試験問題に出たの？」

「え？ ううん。」

「じゃあ、なんだい？」

「鎌倉の大仏はいつたつたか。」

「だからさ、分んない。ダメだ。」

「まだ、たつてないのよ」

「え？」

「すわつてゐるのよ。」

「……！」

まあ、これは、言われるまでもなく、実にみつともないほど他愛なくてくだらない話だけれど、でもなんて言うか、そんなくだらないことでもなんとなく楽しい感じの時つてのがあるものなんだ。そして、だからぼくたちがそんな感じでしゃべり続け、やがて話が司馬遷のことになって、ぼくがつい最近ききかじつたばかりの「宮刑」なんて術語をふりまわした時も、ぼくとしては彼女に対する警戒網をすっかり外して、ほんとに軽い気持だったのだ。そして彼女の方も、へえ、どうやるの？ ああ、チョンギツちゃうの？ なんてごく軽くノッてきたわけなのだ（少なくともぼくはそう思ったわけだ）。そして、ところがどういうのだろう、要するに事態はこんな具合に進展することになってしまった。

「ちがうよ。チョンギツちゃうなんて、そんな簡単なんじゃないんだよ。縛っちゃうんだ、付根のところを。そうすると血液がいけないから、だんだん腐ってくるんだってさ。腐りやすいように、わざと湿気の多い暗い部屋に入れとくんだって、ね？」

「あら、でも、それでどうなんの？」

「どうなんのって？」

「ううん、だって、ほら、男のひとのって、あ、二つの役をするんですよ？」

「え？」

「ほら、そうよ。あの、ほら、男のひとのあの役と、もう一つ、ほら、生きていくために必要なのと……ね？」

「うん？」

「ほら、やあね、分るでしょ？ 困るんじゃない？」

「？」

「そうでしょ？」

「ああ、そうか。どうするんだろ、そういえば。」

「そうよ、おかしいわよ。あなた、また嘘ついてあたしをからかったんでしょ？」

「ちがう、絶対にちがうよ。友達にきいたんだ。ほら、横田のやつだよ。」

「そう。」

「でも、驚いたなあ。全然気がつかなかったんだ。ぼくだけじゃないよ。横田だって小林だってね……。」

「男のひとって、もうそれだけでカーッときちゃうのね。」

「うん、そうなんだなあ。もう一つなんて思いもうかばない……。」

「女の子には大変なのよ。ほら、ジャンヌ・ダルクの話あるでしょ？」

「え？」

「彼女が、あの、神様のお使いじゃなくなっちゃうのは、魔女裁判の法廷で裸にされて、それで